

JALT2007

Challenging Assumptions
Looking In, Looking Out

関西弁自主学习のためのオンライン教材

Web-based materials for self-study of the Kansai dialect

新宮育枝 Ikue Shingu

Massachusetts Institute of Technology

畑中淳子 Junko Hatanaka

The University of Texas at Austin

Reference data:

Shingu, I., & Hatanaka, J. (2008). Web-based materials for self-study of the Kansai dialect.

In K. Bradford Watts, T. Muller, & M. Swanson (Eds.), *JALT2007 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

This project involves the creation of a web-based, self-guided, study program on the Kansai dialect, a powerful regional dialect spoken by over 20 million people in the Kansai area of Japan, where Osaka and Kyoto are located. The project's targeted audience is English speakers with intermediate proficiency or above in Japanese. This project aims to assist students who wish to communicate with local Kansai people at work or in daily life. It will also help students learn to appreciate diversity in Japan through the understanding of the Kansai culture and local identity of Kansai people. This website contains not only descriptive texts but also audio resources for the sentences and drills, and video clips from interviews with local people for the purpose of comprehension exercises. The approach taken to the particular dialect in this project can be applied to other under-represented dialects and cultures everywhere. URL <http://llarc.mit.edu/kansai>

本稿は日本で「最も強い」方言といわれる関西弁を題材に、学習者が授業外で自分のニーズとベースに合わせ、楽しみつつ文法知識および聴解力を養い、かつ地方アイデンティティをも考察できる英語媒介のオンライン教材のプロトタイプを開発した、その開発経過報告である。この教材は英語媒介で日本語初級文法を履修済みの学習者を対象とし、関西圏への留学や就業を控える者が準備段階で関西言語及び文化への理解を深める事を目標としている。この教材の特徴は、オンライン教材の特典を生かし、口語である方言理解に必須の音声と関西話者の映像を例文・モデル会話及び聞き取り練習にふんだんに取り入れた点にある。ここでの手法は、他の地方文化・方言学習、ひいては日本語及び日本文化の多様性を学ぶ教材開発に広く応用可能であると思われる。サイトURL <http://llarc.mit.edu/kansai>

1. 開発経緯

1-1. 日本語学習者の関西弁に対する意識とニーズ

日本語学習者、及び日本をビジネス、留学、観光などの目的で訪れる外国人数は増加の一方と言われているが、彼らに対する日本からの情報発信は依然東京中心となっている。現在メディアで使用されている東京標準の日本語を学習者がまず学ぶのは至極当然のことながら、彼らは日本で必ずしも共通語圏に滞在する訳ではない。地方の大学や企業に派遣された者や、地方でのホームステイを経験する者の中には、学校で学習した日本語と日常接する実際の地方方言とのギャップに戸惑いを覚える者も少なくない。

地方方言の中でも学習者が最も遭遇しやすいのは日本で「最強の方言」と言われる関西方言であろうと思われる。関西弁は周知の通り大阪、京都、神戸などの主要都市を含む関西在住の二千万人強が話す地方方言の総称であり、標準語とは異なり独特の音韻体系、文法体系と語彙を保つ方言である(山下, 2004)。また、最近では若年層に標準語の文法の影響を受けた方言つまり「ネオ方言」(真田 1999, 真田他, 2005)も浸透しつつあり、関西弁自体も時の流れにより変遷しているものの、その特徴は未だ現代関西人に広く強く受け継がれている。また、地方方言はその地域の人々の対人接触・自己表現・思考・行動の各様式の表れ、すなわち地域文化を体現する物である(尾上, 1999)と言われているが、中でも関西弁は話者の地方帰属意識に強く結びついた方言と考えられている。

国内での関西圏からの移住やメディアの影響もあり、関西弁は、日本人なら関西圏外の出身であっても聞いて十分意味が理解できる方言だが、日本語学習者にとってはそうはいかないようである。例えば、2005年にマサチューセッツ工科大学で関西方面の企業にインターンとして派遣された学生16名に対してアンケート調査を行ったところ、職場外で地域の人々、特に年配者とのコミュニケーションがその方言の為難解であった経験を挙げた者が多く、派遣前に関西弁に関する知識または指導があればよかった、と答えている(注: 職場内では標準語あるいはそれに近い言葉が使用されていたためそれほど困らなかつたとの解答が

多かつた)。大学レベルで3年学習歴のある学生を例にとると、奈良にいる友人の家族を訪問した際の経験についてアンケート中でこう述べている。

“...When I was visiting his family in Nara, I realized how different Kansai-ben was. The sentence structure and speaking mannerism are different, and I had a hard time understanding some things, when normally I would be ok if it was standard Japanese... I spoke to his grandparents a lot. It was hard to understand because it seemed like very informal speech. A lot of the phrases would end in "na". Almost like they were conjugating their words differently. I had to concentrate a lot to correctly understand them...”

更に近年、学習者が接触しやすいメディア媒体(漫画、アニメ、映画、外国映画の吹き替え、及びJポップ)の中で、方言、特に関西弁の出現度が上昇している傾向がある。例を挙げると、古くは「うる星やつら」のデンちゃんから、近年では全キャラクターが関西弁を話す「アベノ橋魔法商店街」などのアニメや漫画があり、これらは日本国外の学習者でもオンラインで容易に閲覧購入可能になっている。映画でも最近「シュレック3」が関西弁で吹き替えされた例がある。また関ジャニ8、倅田来未、ウルフルズなど関西弁の歌詞で歌う関西出身の人気Jポップ歌手も少なくない。このような作品を通して学習者が教室での日本語との違いに興味を持つケースは数多いと思われる。我々自身も、米国の大学で学ぶ学習者から「アニメのキャラクターXXが話す関西弁が分かるようになりたいから教えてくれ」等と頼まれた経験は少なくない。

実際に関西方面への留学を控える学習者やアニメ等から関西弁に興味を持った学習者からの要望に応じて、関西弁が課外クラブ活動の一環としてカリキュラムに取り入れられた例もある。米国バーモント州ミドルベリー大学日本語サマースクールでは週一回の関西弁セミナーが2001年夏から2003年夏まで3期

行われ、全学生中の有志20%程度が毎週参加し、教師が用意したハンドアウトやテープを用いて音韻の特徴や有用なフレーズについて学習した。

このような具体例をも考え合わせると、関西弁学習へのニーズ、さらには地方文化及び方言一般に対する学習者の潜在ニーズはまぎれもなく存在すると考えられる。

1-2. 米国における関西弁学習機会の現状

では実際日本語の授業に地方文化や方言を組み込む事はどの程度可能なのだろうか。米国日本語教育界では近年、1996年に設定された全米外国語教育スタンダードの目標領域5C (Communication, Culture, Connection, Comparison, Community)のカリキュラムへの組み込みが重視されているが、この中の「Culture - 文化」とは言っても、それは東京標準文化またはステレオタイプの文化の理解、知識習得が主となっている。この傾向の上に時間的制約と教師側のリソース不足が追い打ちをかけている。前章にミドルベリー大学サマースクールの関西弁セミナーの例を示したが、これは限られた極僅かの例の一つでしかなく、大半の教育機関では方言の存在が紹介される機会自体もほとんどない。このように地方文化、あるいは日本語自体の多様性を教師が学習者に示す機会が非常に限られている現状は悲しい限りである。

カリキュラム内での取り扱いが困難であるのなら、方言に興味ある学習者が自習できる教材は果たして存在するのであろうか。関西弁に限ると英語媒介の出版物—「Kansai Japanese」(Tse, 1995) や「Colloquial Kansai Japanese」(Palter & Slotsve, 2006) 等—及びウェブサイト (nihongoresources.com 等) は多少存在するが、いずれも日本語教育の見地から作られたものではなく、実際の学習者のニーズに応えるには質的にほど遠い感がある。また、日本ではカセットテープ付きの関西弁の教科書である「聞いて覚える関西弁入門」(岡本他, 1998) が以前出版されたが、媒介語が日本語のため、これも初級終了程度の学生のニーズに答える物とは言い難いと言える。

1-3. なぜオンライン教材なのか?

以上のような点を踏まえ、日本語教師かつ関西弁ネイティブ話者でもある我々は、関西圏でのコミュニケーション能力向上を目標として、関西弁を題材とした英語媒介の「ツールとしての」オンライン教材開発に着手することにした。

教科書ではなくオンライン教材の形態を選んだ理由としては;

1. 学習者が場所時間を問わず個々のニーズと学習ペースに合わせて全世界から無料でアクセス可能であること
2. 口語である方言紹介に必須の音声および自然発話を記録した映像の提示が可能であること
3. 教材の改訂、追加、アップデートが容易であること
4. 関西での経験談、写真、映像や情報の投稿などによって学習者の参加・学習者による教材への貢献も可能であること

等が挙げられる。

2. オンライン教材

2-1. 開発コンセプトと対象

関西弁自主学习サイトの開発に際しては、

1. 東京標準の日本語文法との対照で関西弁文法を紹介すること
2. 聞き取り能力向上を重視した教材であること
3. できる限り音声やビデオ映像で自然発話を提示すること
4. 学習者主導で楽しみながら学べること
5. 学習者の関西文化への興味を誘う教材であること

などを念頭においた。

対象は、まず学習者に標準日本語のしっかりした基礎を身につけさせた上で、その日本語と比較しながら関西弁を知っても

りたいという意図から、初級日本語修了者、または大学レベルで2、3年日本語を履修済みの学習者とした。

また、開発開始に際し問題となったのが、関西弁内の地域差をどう扱うかである。前章初めにも述べた通り、関西弁は関西地方で話される地方方言の総称であり、標準関西弁なるものが存在するわけではない。例えば動詞の否定形を作る場合、京滋方面では「行かへん」のように、「ない」を「へん」で置換した形が一般的だが、阪奈方面では「行けへん」のように可能否定と同じ形を取る(山下, 2004)。また、語尾も「へん、ひん、ん」など地域差及び個人差がある。また同じ形であったとしてもそのアクセントにも地域や年代による差が存在する。しかし、このサイトの目標は関西文法の詳細を示す事ではなく、学習者がそれを動詞の否定形と認知できる事が目標なので、例示や練習に使う形は「現代の大阪または京都」中心に一般に使われる形を用い、地域差等の詳細には説明内で触れるのみにした。

その他の開発時及びマテリアル収集段階での留意点の詳細については新宮(2007)の『マテリアル準備過程での問題点と課題』の項を参照されたい。

2-2. サイト構成

このサイトには前述のコンセプトをもとに次のような全七章を設定した。

Chapter 1: Characteristics

この章では、まず関西弁と標準語の違いが短時間で把握できることを目的として、歴史的背景や関西弁と関西人の地方アイデンティティーの関わり合い等について触れた後、更に言語学的特徴についての概要を述べている。説明は英語で例文には全て音声添付しクリックせずにマウスオーバーのみで聞けるようになっている(図1参照)。

図1. 「Chapter 1 – 2. 言語学的特徴」の冒頭部

Chapter 2: Expressions

この章は日常よく使う表現の紹介で、標準語と関西表現を音付きで対比しており、ここでも音声は全てマウスオーバーで聴けるようになっている。多様性を実感してもらうために老若男女の関西弁話者の挨拶を録画したクリップも随時提示した(図2参照)。基本的には聞いて表現や音の違いを分かることが目的だが、後について発音練習をすることも可能である。



図2. 「Chapter 2-1.Greetings」のビデオクリップ部分

Chapter 3: Basic Grammar

この章は 基本文法（動詞、文末表現、て形、コピュラ、形容詞）において関西弁特有の部分を紹介練習するチャプターで、各レッスンは基本会話のビデオ、文法説明、簡単な発話練習、および聞き取り練習、ビデオを用いた聞き取り練習より成り立っている。

- 基本会話：各レッスンのはじめには、導入部分に対象となる文法構造を含んだモデル会話ビデオクリップを制作し演繹的に用いている。会話を目で確かめて比較したい学習者のために関西弁と標準語のスク립トをHide & Show機能で必要に応じ参照できるようにした（図3参照）。またそのビデオを通じ、学習者自身にその課の文型のポイントを推測させた上で、その後、Check up 問題を設定し、そこでポイントを把

握できたかどうか確認できるようにもした。関西特有の語彙を紹介した場合も同様にCheck up問題を設定してある。

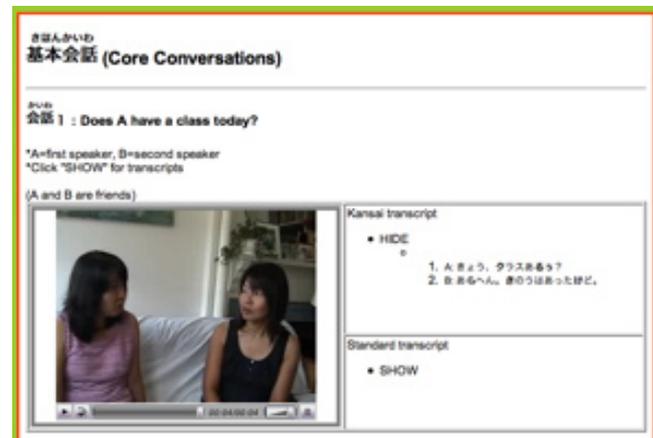


図3. Chapter 3. 基本会話ビデオの提示例

- 文法説明：文法説明では英語の説明に加え、例文をすべてマウスオーバーの音声付きで提示した。
- 練習：ここでは、関西弁で話すため、というより文法知識を定着させるために簡単な発話ドリルを用意した。モデル音声を聞いて入れ替え練習、および答えの確認が自分でできるようにしてある。
- 聞き取り練習：聞き取り練習とビデオ聞き取り練習ではできるだけ楽しみながら基礎文型の聞き取り能力の向上を図ってもらいたい、ということでインターアクティブな練習の開発に努めた。音声を動かしてイラスト/標準語/または返事などとマッチさせるdrag-

n-dropタイプの練習 (図4参照)、及び、音声やビデオクリップを視聴後、多肢選択内容問題に取り組み、答えをチェックできるタイプのもの (図5参照) を用意した。ビデオ聞き取り練習は全て内容の多肢選択問題に統一している。

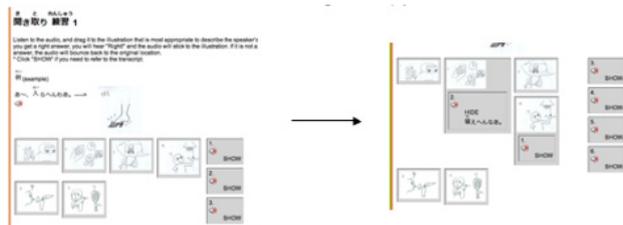


図4. Chapter 3 Drag-n-dropタイプの聞き取り練習問題例

(画面右の音声を左のイラストに持っていくと、正解の場合音声イラストに付くようになってる)

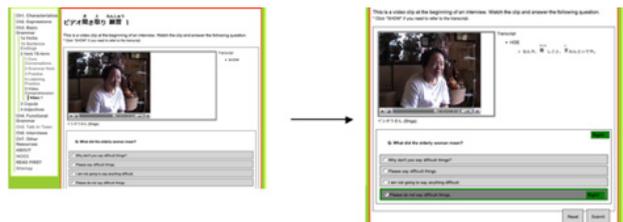


図5. Chapter 3 多肢選択内容問題付きのビデオ聞き取り練習例

Chapter 4: Functional Grammar

ここでは「したあかん」「してもええ」などの禁止許可表現や「食べ!」「そんなことしな!」等の命令形、さらには「はる」敬語など、さらに進んだ機能を持つ文型をとりあげている。構成はChapter 3とほぼ同様だが難易度の高い生ビデオクリップをより多く聞き取り練習に用いている。

Chapter 5: Talk in town

この章には地方の商店街でのスクリプトなしの会話シーンのクリップを使用した聞き取り練習を収録した。語彙はShow & Hide機能で随時参照できるようにし、内容質問は多肢選択で添付した。

Chapter 6: Interviews to Locals

この章は聞き取り練習用の生ビデオのコレクションであるが、関西弁話者、計30数人に行ったインタビュービデオをもとに、学習者がクリップを自分で選択・検索できるシステムにした。クリップ検索は、被インタビュー者から (1. Interviewee 現在22人分)、インタビュー質問から (2. Interview Q 38問: 一般的な導入質問から地方アイデンティティを問うものまで) または (3) 自分の好きな項目でソート検索できるようにした。例えば総合ソート検索ではソート・選択アイテムには、インタビュー質問やインタビューの属性の他に、各々のクリップの難易度と関西弁度 (つまり方言の強さ) も取り入れた。見たいクリップを選んだ後はこのイメージをクリックするとビデオクリップのポップアップウィンドウが出てくるようになっている。聞き取りに必要な語彙はShow & Hide機能で語彙リストとして与え、内容の理解度を測るため、多肢選択の内容質問も加えた。図6では総合ソート検索で、(1) 画面左の検索ボックスからインタビュー質問1 (何歳か) と年代 (十歳以下) を選んで396クリップの中から2クリップに絞り込んだ後、(2) 下方のクリップを選択し、(3) ポップアップ画面中のビデオ試聴後、多肢選択の内容質問に解答した例を示している。



図6. Chapter 6 総合ソート検索の例

現在約400クリップが閲覧可能になっており、さらに多様な話者のクリップを追加していく予定である。

Chapter 7: Other Resources

この章にはパイロットユーザーから要望のあった文化的情報（関西弁のアニメ、映画、Jポップ等に関する情報）や関西に関する有用リンクを掲載するとともに、「学習者参加型のページ」を目標とし、実際関西を訪れた学習者からの意見や体験談、写真、ビデオ等を追加していく予定である。

3. パイロットユーザーへの意識調査

3-1. 調査概要

2007年6月に、Chapter 3までの内容およびChapter 6をほぼアップロードできた段階で、このサイトの方向性の確認や、使用者から見た使い勝手などを知るために、学生ボランティア11人にサイトの試用を依頼し、Eメールでアンケートを実施した。アンケートは、各章及びサイト全体の内容と機能性についての質問21項目に対して五段階評価してもらう部分と、各々について自由に意見を述べてもらう部分より成り立つ。この調査を行った段階では、ウェブサイトは現状のものではなく、デザイン面は未考慮なものの、Chapter 1からChapter 3、及びChapter 6をアップロードした状態であった。参加者は全員、英語媒介で日本語を学習した中級レベル以上の者で、サイト使用前の関西弁の知識が皆無、もしくは友人や漫画アニメからの限られた知識の者ばかりであった。

ここではその集計結果と代表的なコメント及び実際改良を施すのに有用であったフィードバック等を紹介する。尚、表中の平均値はリカート法で5段階の解答を1から5ポイントまでの点数に換算した場合の平均値である。

表1. Chapter 1 & 2について (サンプル数11)

	そうではない と強く思う (1)	そうではない と思う (2)	どちらとも いえない (3)	そう思う (4)	強くそう思う (5)	平均値
Chapter 1は効果的か			2	5	4	4.18
Chapter 2は効果的か				4	6	4.60 (N/A 1)
オーディオサンプル				3	8	4.73
ビデオクリップ				3	8	4.73

3-2. 調査結果

3-2-1. Chapter 1&2

表1に見られるように、Chapter1及びChapter 2ではやはりオーディオサンプルや実際のビデオクリップの効果を認める学習者がほとんどであった。

3-2-2. Chapter 3

表2を見て分かる通り、Chapter 3でも全般的に構成要素を指示する傾向が見られた。コメントとしては、会話ビデオでの導入部分については「関西弁と標準語の対比スクリプトが非常に役に立つ」「内容がユーモラスだ」と好評でビデオ後のチェックアップ問題も「学んだことの補強に非常に役に立つ」というのが複数回答に見られた。文法ノートに関しては、「教科書のように非常に役に立つ」「詳しく基本文法のいい分析になる」というコメントとともに「標準語との対比が全例文にほしい」との要望もあり、アンケート実施後、早速追加した。練習問題については、文型を定着させるためのパターン練習であるため、「単純すぎてつまらない」という感想も懸念したが、実際には「繰り返しの練習がいい」という声が多く、口に出しアウトプットをして自分の理解度を試したいと思う学生も少なくはないと考えられる。現在、状況に即した発話を練習するコミュニケーション練習問題も少

量ながら加えている。聞き取り練習 (drag-n-drop、正誤問題、選択問題、ビデオ練習問題) は、「インターアクティブである点がいい」「ビデオ練習では話し手の表情や自然な会話が見られるのがいい」という評価が多勢を占めた。

3-2-3. Chapter 6

Chapter 6についてはソート検索システム自体やクリップについて自由に意見を述べてもらった。まずソートの仕方では「難易度や質問ごとにソートできる」「自分で見たいビデオが選べる」と学習者がクリップ選択を全てコントロールできる面に評価が高かった。また、インタビュークリップについては、「話し手にバラエティーがある」「日本文化と関西文化をこういった手法で得られるのがいい」「これをサイトのハイライトにすべきだ」といったかなり肯定的な感想が主であった。これらの意見から、この章で用いたような生の会話提示法の有効性に間違いはないと確信した。今後は更にクリップを随時追加して、より多様性を持たせる予定である。

3-2-4. サイト全体

サイト全体について12項目にわたって質問したが (表3参照) 学生からの同意が他の質問より少な目のものが3項目見られた (

表2. Chapter 3について

	そうでは ないと強く思う	そうではない と思う	どちらとも いえない	そう思う	強くそう思う	平均値
構成は効果的か			1	8	2	4.09
会話ビデオは有効か				6	5	4.45
文法ノートは効果的か				4	7	4.64
練習問題は効果的か				6	5	4.45
聞き取り練習は効果的か			1	3	7	4.55

表中ではイタリックで表示)。ディレクトリーについては、レイヤーが非常に多いためその複雑さはある程度は仕方がないが、さらに使用者がなじみやすいサイトとなるよう検討していく予定である。また、こちらが聞き取り能力向上重視の姿勢で作ったサイトであるため、関西弁で話せるようになることをコミュニケーションのゴールと捉える学生は、発話練習が少ないと感じたのではないかと思われる。今後はコミュニカティブな発話練習も補足的に増やしていく予定である。一方、学習者からの評価が特に高かったのは、「オーディオサンプル・ビデオクリップ・Show & Hideなどの機能」と「このサイトの完成版が楽しみか」「関西弁を学習したいと思う人にこのサイトを推薦するか」といった項目であった。やはり方言学習には、音声データでの情報が不可欠であり、生きたビデオクリップの提示や音声データの多様性に効果を認めているようである。

3-2-5. その他

サイト全体を振り返る意味で、「このサイトで気に入った点・好きではない点」についても質問した。気に入った点として複数あがったのは、「ビデオクリップ・音声の数と多様性」「詳しい文法説明」「実際の関西弁話者の話とそのパーソナリティーや関西圏の文化が楽しめる」といったものだった。一方、「このサイトで好きではない点」として複数上がったのは、サイトの見せ方のデザインやレイアウトについてであった。このアンケートの時点では、デザイン面はまだ考慮していないことを強調していたものの、やはりユーザーにはビジュアルイメージが大きく影響するようであり、現在はこれらの声をいかし、写真、イラストを追加し、サイトデザインも大幅に改良した。

また「このサイトで他に要るものは」という質問には、「関西弁が使われているアニメなどのリスト」と「関西文化を紹介する

表3. サイト全体について

	そうではない と強く思う	そうではない と思う	どちらとも いえない	そう思う	強くそう思う	平均値
全体の構成はわかりやすいか				4	7	4.64
ディレクトリーはわかりやすいか		1	2	4	4	4.00
章立て通りの順番でチェックしたか			3	5	3	4.00
オーディオサンプルは効果的か				3	8	4.73
ビデオクリップは効果的か				3	8	4.73
Show & Hideは役に立ったか				2	8	4.80 (N/A 1)
関西弁話者とのコミュニケーション準備に有効		1	0	8	2	4.00
関西弁勉強の面白いツール			1	3	7	4.55
関西弁、関西人、その文化への関心を刺激			1	5	5	4.36
関西への訪問準備に有効				4	7	4.64
サイトの完成版が楽しみ				2	9	4.82
関西弁を勉強したい人にすすめたい				3	8	4.73

情報へのリンク先」という具体的な関西弁使用例の要望が強いようなので、関西弁が使用されているアニメ、映画、歌などの情報を収集し、リンク先なども紹介している。

全体的にこの段階でこのサイトの効果を認め、好意的なフィードバックが多く、ビデオクリップを中心としたサイトの大きな方向性は間違っていないと確信し、ここで出て来た意見は、いろいろな形で現在もサイトの改良に活用している。

4. 今後の展望

このプロジェクトでは、学習者が関西弁の文法構造をインターアクティブな練習を通して学習後、実際のインタビューからの自然発話クリップをもとに、個別の表現の例や個別の発話者の例を検索して更に学べるスタイルを具体化する事を目標とした。今後、現在は未完成の章のアップロードに努めると同時に、学習者のフィードバックを吟味してデザイン内容ともに改良を重ねる所存である。また、著作権のクリアという必要性があるものの、関西弁が使用されているCommercial productsの取り入れ方なども検討し、学習者が求める素材を更に提供していくとともに、究極的には学習者が素材を増やしていけるサイトに持って行ければと考えている。

しかしながら、将来的にサイトが発展して資料が膨大になった場合には、学習者が学習経路を把握しやすくする為の工夫も必要となってくると思われる。さらに学習者参加型になった場合に生ずるであろう倫理上の問題点に慎重に対応する為にも、長期的なサイト管理体制の構築が必要であろう。

最後にこのサイト開発で用いた手法についてであるが、学校カリキュラム内では紹介が困難な「マイナー言語・文化」を学習者主導でしかも生きた形で学べるという点で、他の地方文化・方言学習、ひいては日本語及び日本文化の多様性を学ぶ教材開発にも広く応用可能ではないかと考えられる。今後も様々な方面で同様のコンセプト及び手法を用いた教材が開発されることを期待したい。

Ikue Shingu has been a lecturer in Japanese at Massachusetts Institute of Technology since 2002. She has received M.A. in Japanese from The University of Massachusetts at Amherst in 1997. <ikue@mit.edu>

Junko Hatanaka has been a lecturer in Japanese at The University of Texas at Austin since 2000. She has received M.S. in Rhetoric and Technical Communications at Michigan Technological University and has received M.A. in Japanese at University of Wisconsin-Madison in 1998. <jhatanaka@mail.utexas.edu>

References

- 岡本牧子・宇治原庸子・山本修 (1998). 『聞いて覚える関西弁入門』アルク.
- 尾上信介 (1999). 『大阪ことば学』創元社.
- 真田信治 (1996). 『地域語のダイナミズム』おうふう.
- 真田信治・庄司博史 (2005). 『日本の他言語社会』岩波書店.
- 新宮育枝 (2007). 関西弁自主学习サイト：開発意義と開発段階での問題点 『JALT日本語教育論集』第9巻 第1号: pp.22-31.
- 山下良孝 (2004). 『関西弁講義』講談社.
- Palter, D. C. & Slotsve K. (2006). *Colloquial Kansai Japanese*. Tokyo: Tuttle Publishing.
- Tse, P. (1995). *Kansai Japanese*. Tokyo: Tuttle Publishing.

付記：「開発経緯」及び「オンライン教材」の項については本稿の前段階となる論文 (2007年発行『JALT日本語教育論集』に掲載) を改編したものである。